

モーツァルトの「死者のためのミサ曲」

武本 浩

1791年2月14日、ショットヴィーンなど5ヶ所の領主であったFranz von Walsegg伯爵(1763-1827)の妻Annaが、彼女の住んでいたStuppach城で20歳の若さで亡くなった。伯爵は妻の毎年の命日に行う記念ミサにふさわしい音楽が必要と考えた。そこで以前から師と仰ぎ親交の深かったMozart(Mozartがたびたび借金の申し入れをしていたJohann Michael von Puchbergは再婚するまで伯爵の館に住んでいた)に「死者のためのミサ曲(レクイエム)」を委嘱する目的で、8月の終わり頃二人の使者をMozart家に遣わした。その名は、伯爵家の管財人Franz Anton Leitgebと公証人Johann Sortschan博士である。そこで交わされた契約書には、かなり高額な報酬が約束されているほか、Mozartの自筆譜はコピーを取らないで渡さなければならないという条項も含まれていた。つまり伯爵の意図として愛する亡き妻のために作曲された「死者のためのミサ曲」は自分以外の所有者を認めたくなかったわけである。

Walsegg伯爵は熱心な音楽愛好家で、自らフルートとチェロを演奏し作曲もした。伯爵はFranz Anton Hoffmeisterに自分には非常に易しいフルートパートを、他の弦楽器には超絶技巧を要する四重奏曲を作曲してもらい、それを演奏してみても弾けない楽師たちを笑って楽しんでいた。また、あまり知られていない曲をきれいに自分で清書しなおしてから皆に渡し誰の作品か当てさせたり、と言うより楽員に「伯爵の作品でしょう」と言わせて喜んだり、François DevienneやHoffmeisterの作品の表紙にある作曲家の自署をインクでさも汚れたかのように見せかけ、よくみるとWalsegg作曲と書いてある、というようなこともやっていた。

依頼を受けたMozartはちょうどその頃オペラ・セーリア「皇帝ティートの慈悲」、ドイツ語オペラ「魔笛」の作曲依頼があり、すぐに作曲を始められる状態ではなかった。9月半ばに「皇帝ティートの慈悲」の上演のために出かけていたプラハからヴィーンに戻ったが、「魔笛」の初演が9月30日に迫っており作曲とリハーサルで忙しく、10月7日には「クラリネット協奏曲」を完成させているので、「死者のためのミサ曲」の作曲はそれ以降に始められた、と考えられている。(但し9月下旬に書かれた「魔笛」の序曲のスケッチには「死者のためのミサ曲」の続唱部分"Rex tremendæ"と"Amen"のスケッチが含まれており、この頃には既に構想があった)ところが、10月には健康状態・精神状態の悪化から妻Constanze(1762-1842)からスコアを取り上げられたり、11月18日に初演されたフリーメーソンのための小カンタータ「われらが喜びを高らかに告げよ」の作曲、リハーサルで中断されたりして結局、未完成のまま12月5日午前0時55分死亡した。死因は当時の死亡鑑定書によると"hitziges Frieselfieber"となっている。(Carl Bärによると死因はリュウマチ性熱で、直接の死因は死の直前に施された寫血による心不全)

Mozartの死後、多額の借金をかかえたConstanzeはすでに前金を受け取っている「死者のためのミサ曲」をなんとかしてでも完成させなければならなかった。まずMozartが生前に高く評価していた友人の教会音楽作曲家で後にヴィーン宮廷楽長になった、Joseph Leopold Eybler(1765-1845)(彼はミサ曲を30曲以上作曲している)にこれを委ねることにした。12月21日、Eyblerは1792年3月中旬までにこれを補完し、他にコピーを取らない、Constanze以外の人に渡さないという請負書を作成した。Mozartが自力で仕上げたのは入祭唱だけで、続唱(但し、"Lacrimosa"の第8小節目までで、この曲の後半は平和の賛歌と同じ歌詞の部分があり、調和をとるために後回しにされた)と奉納唱は完全なコーラス部分とオーケストラの一部のパートに簡単な動機を記しただけで、感謝の賛歌、平和の賛歌、聖体拝領唱は全く作曲していなかった。Eyblerに委ねる前に、あわれみの

賛歌は弟子のFranz Jakob Freystädtler (1768-1841)がコーラスの声部を管・弦にコピーするだけの単純な作業を、Antonio Salieri (1750-1825)の弟子でMozartが写譜屋として雇っていた、Franz Xaver Süßmayr (1766-1803)がトランペットとティンパニのパートの補充をしてオーケストレーションを仕上げたが、これはMozartの死後12月10日にEmanuel Schikanederらによって行われた追悼集会で演奏するために急いでなされたものと推測される。Eyblerは渡されたMozartの自筆譜に"Confutatis"の最後まで自らのオーケストレーションを書き込んでいった。ところが、数日後、絶筆となった"Lacrimosa"の8小節に続く2小節のソプラノパートを作曲しかけて補筆を断念してしまう。どうも1792年になってEyblerはCarmelite教会の聖歌隊長に就任したために補筆に十分な時間を取れなくなってしまったらしい。

Eyblerからスコアを受け取ったConstanzeは未完成部分の補筆を数名の作曲家に打診したが断われ、結局2月頃、Süßmayrにこれを委ねることにした。SüßmayrはEyblerの筆跡があまりにもMozartの筆跡と異なっていたので、まず続唱と奉納唱のMozartの自筆部分をコピーしてから自らのオーケストレーションを書き加えていった。"Lacrimosa"の第9小節目以降、感謝の賛歌、平和の賛歌は新に作曲し、聖体拝領唱はMozartがかつてミサ曲K.196bやK.317であわれみの賛歌の主題を最後の平和の賛歌にもう一度使った様に、入祭唱とあわれみの賛歌を再利用することで全体の調和を整えた。(Constanzeによると再利用はMozartの指示だったということだが、Süßmayrは独自の考えだったと主張している)補筆にあたって彼はかなりの部分でEyblerのオーケストレーションを参考にし、新たに作曲した部分は「魔笛」「皇帝ティートの慈悲」から素材を借りてきてMozartらしさがでるよう苦心した。3月頃、スコアの冒頭に「1792年モーツァルト作曲」と書き入れて補筆を終え、Constanzeに渡した。Constanzeは契約に違反してすぐに2つのコピーを作成しオリジナルを依頼主に、コピーの一つは手元に残し、もう一つはライプツィヒの出版社Breitkopf und Härtelに送った。(これは後で依頼主がConstanzeを契約違反で訴えることになった)そしてMaximilian Stadlerが自らの手でもう一つのコピーを作った。

スコアを受け取ったWalsegg伯爵はすぐにいつものように自ら清書しなおし、楽章毎にヴァイオリン奏者のBenaroに渡してパート譜を作らせた。そして1793年12月14日午前10時からノイシュタットのパリ教会で行われた追悼ミサでWalsegg伯爵の指揮で初演された。(これに先立つ試演は1793年1月2日にGottfried van Swieten男爵の計らいでConstanzeのための慈善的な催しでなされた)そして1794年2月14日、妻の命日にはWalsegg伯爵が編曲した弦楽五重奏版でその死を追悼した。

近年、Süßmayrの犯したたくさんの作曲技法上の誤り(平行五度や平行八度など)、モーツァルトの自筆稿からのコピーミスやオーケストレーションの下手な箇所を改良(?)した新版が出版されているが、Süßmayrはジंकシュピール作曲家としての地位を築いていかなければならなかった、この多忙な時期に(5月4日には初めてのジंकシュピール「モーゼあるいは出エジプト記」を初演した)自分にとってなんの利益にもならない「死者のためのミサ曲」「ホルン協奏曲第1番二長調(4月6日に補筆完成)」の補完をしたばかりに後世まで非難され気の毒と言えれば気の毒だが、Mozartの名と共にこれからもずっと語り継がれていくことだろう。

本日のモーツァルト没後200年記念追悼ミサにおいて、この「死者のためのミサ曲」はLeopold Nowakが校訂したSüßmayr版(新モーツァルト全集)にモーツァルトの自筆稿をもとに若干の訂正を施したものを使用する。演奏を担当するのはソプラノ独唱が林裕美子、アルト独唱が向井順子、テノール独唱が山下文裕、バス独唱が井上敏典、コーラスが姫路C.G.S.合唱団、オーケストラが大阪モーツァルトアンサンブル、そして指揮が今村雅俊である。

モーツァルト没後200年 モーツァルト追悼ミサ 式次第

R. ヴァン・デ・ワーレ神父 (司式)
1991年12月5日(木) 午後7時
大阪カテドラル聖マリア大聖堂

SYNAXIS

I. RITUS INITIALES

- (1) Formula salutationis
- (2) Introitus (Mozart)
- (3) Kyrie (Mozart)
- (4) Collecta

II. LITURGIA VERBI

- (1) Epistola
- (2) Graduale (Cantus Gregorianus)
- (3) Tractus (Cantus Gregorianus)
- (4) Sequentia (Mozart/Süßmayr)
- (5) Evangelium
- (6) Homilia

EUCCHARISTIA

I. OFFERTORIUM

- (1) Offertorium (Mozart/Süßmayr)
- (2) Suscipe
[Secreta]

II. PREX EUCHARISTICA

- (1) Præfatio
- (2) Sanctus (Süßmayr)
- (3) Canon Missæ

III. RITUS COMMUNIONIS

- (1) Oratio dominica
- (2) Agnus dei (Süßmayr)
- (3) Communio (Mozart/Süßmayr)
- (4) Invitatio ad convivium
- (5) “Ave verum corpus” (Mozart)
- (6) Postcommunio

IV. RITUS CONCLUSIONIS

集会の儀

I. 開祭の儀

- (1) 入祭のあいさつ
- (2) 入祭唱 (モーツァルト)
- (3) あわれみの賛歌 (モーツァルト)
- (4) 集会祈願

II. ことばの典礼

- (1) 書簡
- (2) 昇階唱 (グレゴリオ聖歌)
- (3) 詠唱 (グレゴリオ聖歌)
- (4) 続唱 (モーツァルト/ジュスマイヤー)
- (5) 福音書
- (6) 説教

感謝の典礼

I. 奉納の儀

- (1) 奉納唱 (モーツァルト/ジュスマイヤー)
- (2) 奉納祈願
[密唱]

II. 奉納文

- (1) 叙唱
- (2) 感謝の賛歌 (ジュスマイヤー)
- (3) ミサ典文

III. 交わりの儀

- (1) 主の祈り
- (2) 平和の賛歌 (ジュスマイヤー)
- (3) 聖体拝領唱 (モーツァルト/ジュスマイヤー)
- (4) 聖体拝領への招き
- (5) 「アヴェ・ヴェルム・コルプス」
- (6) 聖体拝領祈願

IV. 閉祭の儀